



## 『ダニのはなしー人間との関わり』

島野智之・高久 元 編

2016年1月 朝倉書店 発行

192頁

定価 (本体 3,000円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群)

4, 5年前, 居酒屋で病理の学生に「概して授業は面白いですが (本当かしら?), 節足動物を扱ったコマでは, 明らかに, トーンダウンでしたね」と云われた。寄生虫病学の講義を開始したのは, この学生の代からだだったので, 酔いに任せての声でも, 貴重な意見として承ったが, それにしても, 鋭い。評者の研究背景は蠕虫であり, 節足動物は苦手なので, 見事に見抜かれてしまった。だからと云って, 45コマ中4コマのためだけに節足動物の専門家が配置されることはない。もちろん, 節足動物は生物多様性を具現化したようなグループなので, このような現状は, 後ろめたく, かつ忸怩たる思いである。せめて, 履修者には良書を示し, 自習を呼びかけたいが, 相手は中弛みの学部3年生。加えて, 彼 (女) らが最後に, 教科として節足動物と向き合ったのは, 小学中学年の昆虫観察か。その当時の知識で, 怠惰傾向の学生に知的興奮を伴った独学を継続させることは至難の業なのである。

本書とはそのような状況下で出会った。標題を見た瞬間, 「昔読んだ青木 (1968) のリメイク版か」と思ったが, 予想を完全に裏切った。評者のような世代では, この名著を読んでいるものが多いので, 商機面では, この本, 題名で損をしているのではないのか。

それはともかく, 本書は超ベテランから若き気鋭の25名による次のような章題本文あるいは関連コラムが著されていた; ダニとは, 病気を起こすダニ①から③, 森のダニ①と②, 水のダニ, 住のダニ, 農業のダニ①から③, ダニとの共生。最初の章で, ダニが如何に普通の存在かを示した後, ダニをほかの節足動物の対比しつつ, 最新研究結果を提示しながら語られていた。とても解りやすい, いや, それ以前に親しみのある図が用いられ, 間違いなく初学者でも理解できるであろう。それにしても, 到る所にダニがいる。評者のゼミ生は糞便検査を日常的に行うが, その際, 自由生活性あるいは動物の餌となった飼料に由来するダニなどの卵が見つかり, そのたびにゼミ生を困惑させている。が, これを読めば, 仕方無しとして諦めるであろう。また, この序章は, 国試には出ない (したがって, 教授されない) 有害動物あるいは不

快動物のサソリやクモなども自然に理解できる仕組みになっているので, 公衆衛生分野やそのような動物が生息するフィールドで調査する学生・院生にも有益である。もちろん, こういった動物を深く学ぶには, より独習を継続する必要がある, その基礎固めとして十分という意味で, である。

ところで, 海に適応したダニとの対比で, 昆虫では潮だまりのウミアメンボ以外知られないと受け取りかねない表現があった (3頁)。されど, たとえば, アザラシやアシカのシラミ類 (城戸ら, 2016) の中には, 剛毛に空気を貯めるように形態変化をさせ, 海洋環境に適応しているグループもある。また, その潮だまりにしても, ヤブカ類のアメンボが元気に泳いでいるので, 海の昆虫は決して例外という訳ではない。さらに, ササラダニ類が「獣に無害」 (70頁) という記述。このダニ類はいくつかの条虫類の中間宿主となり, この中にはウマの盲腸に濃厚寄生し, 重大疾患の原因になるものも含む。したがって, 完全なイノセントとは云い切れない。以上のように, (著者らのあまりのダニ好きゆえの) ややバイアスのかかった記述があるので, 初学者は注意をして読みとって欲しい (えっ, どうやって?)。

本書前半で, 動物衛生・公衆衛生で知るべきマダニ類, ツツガムシ類およびイエダニ・ヒゼンダニ・トリサシダニ類ほか, それぞれに独立した章が充てられ, かつ, 冒頭の口絵で示されていた。寄生虫病学の授業では物足りない部分を補強し, かつ, 「ほか」 (59頁から61頁) に含まれたシラミダニ類 (昆虫寄生のケダニ亜目で, 卵胎生をする種群) のヒト皮膚炎惹起は新たな情報であった。そして, その色彩からタカラダニ類が, 気の毒にも不快動物として迫害されていたことも知った。なお, 昆虫のダニといえ, 家畜伝染病予防法にも指定されるミツバチのアカリンダニ症で93頁から94頁にコラムとして詳述されていた (一方, 本書ではバロア症については言及されない)。この法律は獣医師にとって遵守すべきものとして, 最重要なものであるが, ダニの本学の授業で各論に充てられるのはたった一コマ60分だけであるので (ほか各論は昆虫), とてもミツバチのダニまで教えられない。今のところ, 本学では伝染病の中で講ぜられているが, 細菌性疾患が中心となる。

それはさておき, 北海道の森ではトガリネズミの死体が林道上で散見され, シデムシの御馳走になっている。この甲虫の体表にはほぼ確実にヤドリダニ類が便乗している。この姿が (ほかの昆虫のダニと伴に) 口絵の写真にあり, 見た者にインパクトを与えよう。評者は今後の野生動物医学において, 無脊椎動物医療も重要な位置付けになると予想をしているが (近藤・浅川, 2015),

このような図や本書の記述は、その思いを強化してくれた。

寄生虫（病）学では、原虫（病）や蠕虫（病）がメインで、ダニを含む節足動物、あるいはこれに直接起因する病気はあまり前面に來ない。しかし、繰り返すが節足動物は生物多様性のモデルになるほどの動物群である。また、節足動物自体、将来、個体診療の対象になるかも知れない。そうなると、旧来の寄生虫（病）学とは別の取り組み方をすることは探れないものか。たとえば、寄生蠕虫や衛生動物に加え、水族館で飼育される蠕虫やほか無脊椎動物、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類を総合的に扱う「獣医動物学」のような分野を、野生動物医学の中に体系的に組み入れることである。なお、原虫は別界 Kingdom なので「獣医動物学」からは除外されているのがミソ。

いけない、いけない。軌道修正をしよう。要するに、ダニだけに絞っても凄まじい曼荼羅なので、そういう大層なことを、つい、夢想させる。本音はそういう本であった。

#### 引用文献

- 青木淳一. 1968. ダニの話-よみもの動物記. 北隆館: pp261.  
城戸美紅, 水島 亮, 浅川満彦. 2016. 襟裳岬産ゼニガタアザラシから見出されたEchinophthiriidae 科シラミ類の一例. 北獣会誌, 60: 96-98.  
近藤達成, 浅川満彦. 2015. 展示・愛玩用クモ・昆虫類の寄生虫症. 北獣会誌, 59: 269-271.